近況レポート

# 夢洲の未来を考える協議体づくりを

文・写真　加賀 まゆみ（夢洲生き物調査グループ）

今年、セイタカシギの繁殖は確認できないで終わった。昨年のコアジサシ繁殖エリア（プラスチックドレーン林立地）は、昨冬、砂で整地され、その上を飛散防止剤の塗料がまかれたが、そこに5月から繁殖地観察のために自動カメラを設置させてもらっていた。カメラの中でコアジサシの繁殖こそ捉えられなかったものの、送られてくる動画から、コアジサシの声も聞こえていたし、さまざまな野鳥が飛びかう様子も見ることができた。一本の草も生えていない砂地には、雨が降るとすぐに浅い池ができ、そこに水浴びをしに鳥たちが集い、そしていつの間にか周りには草が生えた。夏、すでに草原といえる風景になった2区には、時には猛禽類の狩りの様子が見られたが、8月末カメラ設置は終了した。

購入土砂をかぶせているとはいえ、地面の下は浚渫土砂や産廃など。そこにわずか3，4か月で、これだけの自然環境が回復している。大阪湾の人工島・夢洲の自然回復力は、目を見張るものがある。最近、大阪大学大学院の留学生エミリー・ルトゥゼイさんが夢洲グループに加わった。文化人類学専攻で、人間と自然環境とのかかわりに興味があるという。彼女は「夢洲のなにがすごいって、その自然回復力だと思う」と言っている。

世界中で干ばつが深刻化、また別の場所では記録的な豪雨での大洪水など、地球のあらゆるところで異常気象の環境悪化が人間の生存をも圧迫しているというこの時代に、これからまた、エネルギーを消費し、人間の享楽のための施設を創ろうとする愚かしさ。都会のすぐ近くに、これだけ環境回復力を持つ場所があるのに、どうしてそれを研究し、未来に活かそうとしないのか。

5月、住民監査請求が棄却されたのち、訴訟は難しいと判断し、大阪港湾局に何度か面談・協議を申し入れた。また、7月27日、WWFジャパン・日本自然保護協会・日本野鳥の会や野鳥の会大阪支部とともに、博覧会協会と協議の場を持つなど、各組織へ向け、個別のテーマでの協議は少しずつ進めている。エミリーさんには、フランス帰省の際、パリの国際博覧会本部に私たちのメッセージを託した。環境大臣政務官に就任した大阪出身の柳本参議院議員に要請状も送った。

私たちは今後、夢洲に関係する諸団体と行政組織などで、生物多様性の宝庫である夢洲の自然をどう守っていくか、ともに立案・協力する協議体を作りたい、という思いで動いている。

写真-1　8月28日、2区水たまりにハヤブサが来ていた。
近くにミサゴも。（遠方より超望遠で撮影、磯上慶子）

写真-2　草原になった2区を調査するエミリーさん。
右側のポールは自動カメラ。